

歩 ~LIFEをつなぐ道~

20XX年、大規模自然災害が発生。

そのとき、私たちが取るべき行動は何か…
対策としてできることは…
まちの景観を乱してでもすべての災害を防ぐ巨大な施設を
まちなかに設けるのか？

どれほどの快適な避難施設を設けたところで
安全に避難できるのか。
命を守るために重要なことは
安全かつ迅速に避難できることである。

避難路を個性あふれる遊歩道として整備することで
日常は都市部で希薄となった地域コミュニティの再生を図り
非常時は慣れ親しんだ道を使い、みんなで助け合いながら避難する。

個々の生活~LIFE~をつなぎ、地域の結束を強化する。
助け合い、安全・迅速に避難することで、命~LIFE~をつなぐ。

都市部の現状

◆地域コミュニティの希薄化

何百万人もの人が暮らす都市部。戦後、マンション建設が急速に進み、居住者が急増したが、近隣住民どうしの交流が少なくなり、地域コミュニティは衰退の一途を辿ってきた。

◆地域性を反映した景観の減少

生活の利便性や快適性を追求してきた都市開発により、その地域でかつては親しまれ育まれてきた伝統・文化・慣習、地域を形作っていた地形や風土が失われ、これらの地域性が息づいた地域は少なくなってきた。

◆迫るインフラの寿命

都市生活を営む上で不可欠な高速道路、都市鉄道、橋梁、上下水道、通信網などの社会資本は、整備が加速した高度経済成長期からおおむね50年以上が経過し大規模更新・改修という転換点を迎えている。しかし、自治体は厳しい財政状況に直面しており、抜本的な更新に踏み込めていない。

◆意識することの少ない避難経路

巨大災害が発生した場合、指定された避難場所へ避難し、身の安全を確保することが重要となる。しかし、普段から避難場所を意識することが希薄な都市部の住民や土地勘のない観光客は混乱するため、避難には多くの時間を要する。

多くの課題を抱えるまち ー大阪市ー

◆260万都市ー大阪ー

日本三大都市のひとつ、大阪。オフィスや商業・観光施設などが集積するエリアでは、ヒト・モノが盛んに往来し賑わいのある空間がうまれている。その一方で、地域コミュニティは希薄化の一途を辿っており、隣近住民どうしのかかわりが薄れてきている。

◆「水の都」おおさかと現在

近世、豊臣秀吉の手により東横堀川・西横堀川などの水路が整備され、「水の都」として繁栄していた。また堀川を渡る橋が次々と架けられ、「浪華八百八橋」と呼ばれ、水と親しむ文化が育まれた。しかし戦後、堀川を埋め立てるかたちで本格的な道路整備が行われ、堀川や橋の存在感は薄れてしまった。

◆更新時期を迎える阪神高速道路

阪神高速道路は、大阪市内の拠点を結ぶ環状線をはじめ、堺・神戸・京都などの拠点都市間を結ぶ道路交通の大動脈として重要な役割を担っている。阪神高速道路は1号環状線の供用開始から50年以上が経過し、大規模更新の時期を迎えている。

◆防災対策と市民の意識

地震、津波、洪水、局所的豪雨などの巨大災害に備え、学校や公共施設などの一時避難場所、大阪城公園などの広域避難場所が指定されているが、発災時のことを市民が普段から意識することは少ない。

大阪市の交通ネットワークと拠点地域



大阪市中心部には、国道や府道などの主要道やJR・私鉄・地下鉄などの鉄道路線が東西・南北方向に延び充実している。また、オフィスや商業・観光施設などが集積する梅田エリア、中之島エリア、心斎橋エリア、難波エリア、天王寺エリア等では、ヒト・モノが盛んに往来し、賑わいのある空間がうまれている。
阪神高速道路は、それらのエリアを環状線で結び、かつ堺・神戸・京都などの拠点都市間を結ぶ道路交通の大動脈として重要な役割を担っている。
災害時には、その広域なネットワークを活用し、広域避難所を結ぶ避難路および緊急物資等を輸送する交通路として利用する。
高速道路を単なる交通ネットワークとしての利用にとどめないまちづくりを提案する。

大阪市の堀川位置図



コンセプト ~LIFEをつなぐ道~

Link 地域の自然とコミュニティ空間とのつながり

阪神高速道路の高架下を大阪の水と触れ合うことのできる空間とすることで、住民どうしの交流が生まれ、また被災時には住民間の連携が円滑に行えるようになる。

Innovation 高速道路の大規模更新

阪神高速道路は耐震性を高めるとともに、阪高=古い・暗いというマイナスイメージを払拭し、明るく素敵な空間であるという印象を抱かせるデザインへと刷新する。

Fit 大阪の歴史・地域文化になじむ

堀川や橋と一体的となる親水空間を創出することにより、戦後急速に進んだ都市開発で失われてしまった「水の都」の姿を、再びまちに溶け込ませる。

Evacuation わかりやすい避難路

広大な阪神高速道路のネットワークが、災害時において避難場所を結び、人々を安全な避難場所まで導く避難路の役割を果たす。

●堀川沿い空間を利用



対象エリアの現況

東横堀川岸および高架下には歩行空間と新たな親水空間利用を創出する。大阪の地域資源を活かし、歴史・自然と共存する魅力あふれる空間を創出することで、地域の人々の新たなコミュニティ場となり、空間に愛着をもつ。また観光地としても賑わうことでコミュニティの拡大を図る。

この普段から馴染みある空間が災害時には避難路となるため、住民は道に迷うことなく避難する。土地勘のない人は、高速道路や避難所に向かう住民を目印に避難できる。
避難路では、平常時に育まれたコミュニティにより、助け合いながら安全に避難所に向かう。そして、大切な命が守られる。

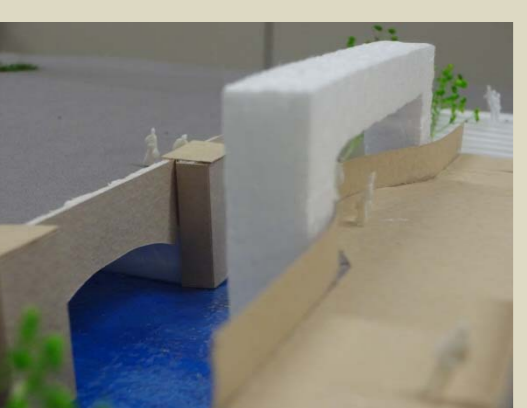


豪雨災害時の利用イメージ

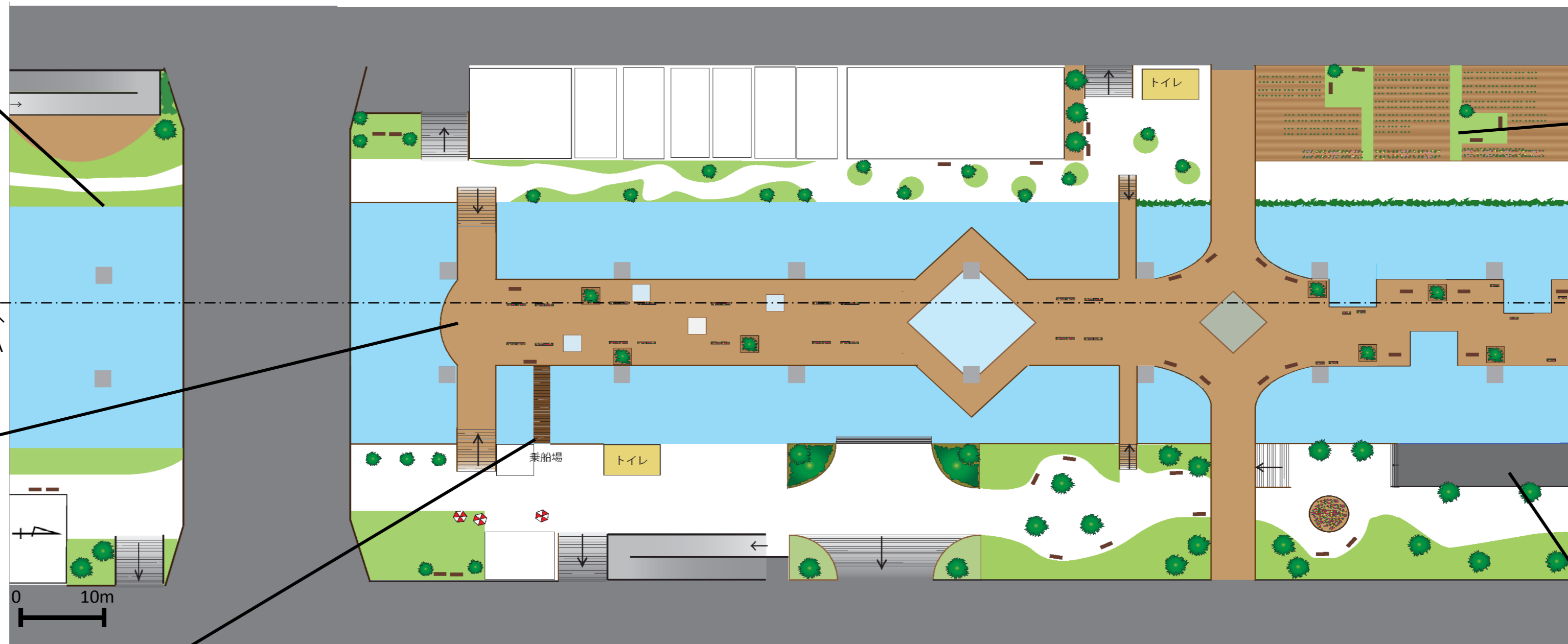
ステージでは、ライブや漫才など大阪の文化を対岸からも楽しむことで、分断されている空間のつながりを創出する。



大阪で最古の本町橋のビュースポットを設けたり、川を覗き込める空間を作ることによって水の都「大阪」の景観を活かす歩道とする。



クルージングの乗降場も同時に整備することで地域の人だけでなく観光客にも魅力ある空間として整備する。



配置図

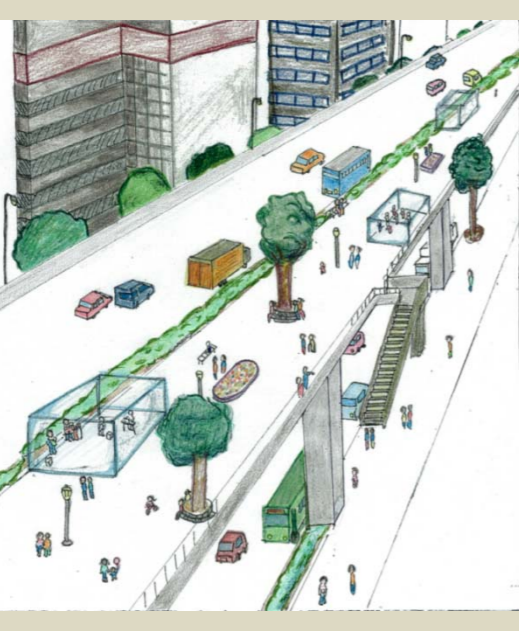
都市部には“庭”がある住宅が少ない。遊歩道の一部を個人に貸し、庭や畑として利用してもらうことで空間に愛着を持ってもらい、日常的に利用して貰う。そこには“庭”を通したコミュニティが創出される。



川を断面から見ることで、堀川にすむ生物や植物を学ぶことができ、自然への理解を深めることができる。



●高架上部空間を活用



高架の上に歩行者のためのスペースを創出し、一定間隔おきに屋根付・ガラス張りの休憩スペースを整備することで、まちに開けた、新たな景観とコミュニティ空間を創出する。
また、高架下からは階段やエレベータを利用して高架上にあがれる。
<平常時>
青空、大阪湾に沈む夕日など、地平からはほとんど眺める機会が少ない景色に親しむことのできる空間となる。
<災害時>
建物の倒壊や浸水等で高架下空間が失われても、阪神高速道路のネットワークを活かし、高架上を避難路として避難場所へ安全に避難することが可能となる。
また、大雨のときには、休憩スペースが雨宿りのための空間として利用できる。

●高架下部空間を活用



高架下に商業空間を設け、直上に高速道路と直結した駐車場を整備する。高架下空間が商店街とSAの二役を果たし、人々の交流促進やまちの活性化に寄与する。また、駐車場利用者は階段やエレベータを使用して高架下の商業施設等にアクセスすることができる。
<平常時>
歩行空間を広く確保することにより、市民が歩いて楽しいと感じられる空間となる。
<災害時>
歩行空間が広く確保されているため、高架下空間を避難路として利用でき、また、すぐに避難場所へと移動できない人にとっての一時避難場所として利用できる。その際は、販売されている商品の一部を災害支援物資として避難者に提供する。